

新購入主要文献解題

Slavery, Abolition and Emancipation: Writings in the British Romantic Period Peter Kitson and Debbie Lee eds., 8 vols. (1999, Pickering & Chatto).
(『英国ロマン主義文学：奴隷制度の廃止と開放』全8巻)

英国では、ロマン主義時代において、奴隷制度が最も激しく批判された。ロマン派第一世代の文人たちは、英国の奴隷貿易だけでなく奴隷制度そのものの禁止を激しく訴えた。また、政治家、ジャーナリストたちは、奴隷問題、西インド諸島やアフリカの文化や社会について著述したり、論争したのであった。1807年には、英国の奴隷貿易が廃止され、さらに1833年には、奴隷制廃止法案が議会を通過して、植民地の奴隷解放が行なわれていった。

本著作集は、第1巻「黒人作家」、第2巻1部「奴隷制度廃止論者」(Edmund Burke, S. T. Coleridgeなどの著作)、第2巻2部「奴隷貿易支持」、第3巻「奴隷開放」(人道主義の貴族 William Wilberforce, Thomas Clarksonなどの廃止論)、第4巻「詩」(William Blake, Robert Burns, S. T. Coleridge, Hannah More, Robert Southey, William Wordsworthなどの詩)、第5巻「戯曲」、第6巻「小説」(Maria Edgeworth, Mary Sherwoodなどの小説)、第7巻「医学と西インド諸島奴隷貿易」(英国下院議会の文書など)、第8巻「人種：索引」(政治ジャーナリスト William Cobbet, スコットランドの法律家・哲学者 H. H. Kames, 人類学者 James C. Prichardなどの著作)の8巻で構成されている。各巻には、序文と著作ごとに頭注及び編集上の注釈が付いている。

本書は、当時の英国の革新的な文学者、政治家、ジャーナリストたちが奴隷貿易・奴隷制度に対してどのように反対したのかを、詩、戯曲、小説という文学だけでなく、政治、経済、哲学、歴史、

医学など広い領域に及んでよく伝えている貴重な資料である。(岩崎豊太郎記)

Aesthetics: Sources in the 18th Century John Valdimir Price ed., 8 vols. (1998, Thoemmes Press).
(『18世紀美学文献集成』全8巻)

このコレクションでは、知名度が高く入手しやすいテキストほどには知られていないが、同じように重要な著作をまとめている。また、今日入手が困難な稀覯な文献も含まれている。

本書には、18世紀哲学の権威 John Valdimir Price による、序文、および各巻の著者とテキストについての注釈が付けられている。編集者の Price によると、'aesthetics' という言葉は、18世紀に出版された英語の書籍のタイトルには見られないが、美、趣味、崇高、想像力のような、18世紀の美学の研究にとって、他の基本的な概念、少なくとも言葉は、頻出しているという (Vol. 1, vi)。

本書には、18世紀の美学理論家が、美、想像力、趣味、詩、音楽、崇高などの意義を明確にするために取り組んだ著作が集められている。次に各巻の収録内容を、すべてではないが記したい。

Volume 1: Jonathan Richardson, *Two Discourses* (1719)

Volume 2: Zachary Mayne, *Two Dissertations concerning Sense and Imagination* (1728).

Volume 3: George Stubbes, *A Dialogue on Beauty. In the Manner of Plato* (1731).

: Joseph Spence, *Crito; or a Dialogue on Beauty* (1752).

Volume 4: John Gilbert Cooper, *Letters concerning Taste* (1755).

Volume 5: Danniell Webb, *Observations on the*

Correspondence between Poetry and Music
(1769).

Volume 6: James Usher, *Clio: or, A Discourse on Taste. Addressed to a Young Lady* (1809).

Volume 7: Richard Burnaby Greene, *Critical Essays... Observations on the Sublime of Longinus, etc.* (1770).

Volume 8: William Jackson, *The Four Ages; Together with Essays on Various Subjects* (1798).

本集成は、ヒューム、シャフツベリ、パーク、ホーム、ワーズワス、コウルリッジなどの研究家にとってもきわめて興味深い文献と思われる。

(岩崎豊太郎記)

『清代秘密結社档案輯印』(全10冊)

黎 青主編 華東師範大学出版社

1999年1月刊

中国における秘密結社の活動は長い歴史を有するが、清代になると各種の結社が勃興して活発な動きを示し、200余年の清朝統治に重大な影響を及ぼしたので、支配者としてはそれへの対策、鎮圧に頭を悩ますことになった。そこで、各地に展開する秘密結社の動きに関する調査報告やそれへの対応について清朝と地方官とのやりとりの記録が多量に生み出されたのである。清朝宮廷内に残されたそれらの資料(中国語で「档案」という)は、1925年来各種の雑誌や資料集の中で公表されてきたが、いずれも限られた時間、あるいは事件別の資料であったため、清代のそれらの活動を通覧するには不都合であった。

この点を克服して、清代17世紀中葉から20世紀初頭までの全期間の関連資料を収録したのが、この全10冊の資料集である。具体的には、白蓮教、羅教、黄天教等の宗教結社、及び天地会、三合会、小刀会等の幫会を網羅していて、清代の秘密結社の状況を理解するのに大変便利な内容となっている。

(大里浩秋記)

『F.V. ディキンズ全集』全7巻

Collected Works of Frederick Victor

Dickins Edition Synapse

F.V. ディキンズ(1838~1915)の名前を知っている日本人は少ないが、明治維新时期に海軍軍医として来日し、退官後横浜で弁護士として活躍し、のちにロンドン大学の事務総長になった英国人の日本研究家で、アーネスト・サトウ、チェンバレン、カール・フローレンツなどと親交があった。彼が維新の二年前に出版した『百人一首』の翻訳は百人一首の最初の完訳となり、同時に日本文学の英訳第一号となった。ディキンズはまた、『富嶽百景』その他の葛飾北齋に関する著述によって、北齋を学術研究の対象として最初にとり上げた人でもあった。帰国後ロンドンで知り合った南方熊楠の協力を得て日本文学の翻訳に専念し、『万葉集』、『竹取物語』、謡曲『高砂』、『方丈記』、『忠臣蔵』など多数の日本文学を翻訳し、さらに彼の日本文学研究の集大成ともいべき二巻本『古代中世日本語テキスト』(Primitive and Mediaeval Japanese Texts)を出版した。

今回のディキンズ全集は彼の著述のすべてを集めて復刻集成したもので、英国の科学雑誌 *Nature* に掲載されたモースの大森貝塚発見への反論のほか、学術誌に掲載された多数の論文も収録されている。ディキンズの業績は文学だけでなく、法律と医療の分野にもわたり、1870年代の横浜の外国人コミュニティーの一員としての活躍も重要である。この全集によって彼の業績の全容が明らかになり、彼の日本への貢献を再評価することができることは意義が深い。(秋山勇造記)

『ブラッドショー 初期英国鉄道地図』復刻版

19世紀末イギリスのランカシャーで始まった産業革命は、近代資本主義社会が確立され、そのグローバル化が推進される契機として、その重要性をいくら強調してもし過ぎるということはないが、この産業革命を影で支え、その成功に大きく貢献したインフラストラクチャとして看過しえないのが近代的な交通・運輸体系の開発整備であ

る。それはまず1790年代の運河建設ブームに始まり、1820年代以降の鉄道建設ブームによって完成する。本鉄道地図の作成者ブラッドショー(1801~1853)は、まさにこれらのインフラ開発整備期に産業革命の中心地マンチェスターに生れ、生涯を草創期の交通・運輸体系の情報蒐集と情報発信(出版)につとめた功労者である。

さて、今回購入した本復刻地図(本の友社、1997)は、表題は鉄道となっているけれども、運河をも含む次の4種類の地図が収録されている。

1. ランカシャー・ヨーク・ダービー・チェスター運河地図(1829)
2. ミッドランド運河・可航河川・鉄道地図(1829)
3. イギリス南部運河・可航河川・鉄道地図(1830)
4. イギリス鉄道地図(1839)
5. イギリス鉄道地図(1849~50)

いずれももともとは折畳み式の大判の地図であるが、これらの原本の折目に沿って、原則として2マスずつを原寸で収録し、全体としてA3版116頁にまとめられている。彩色も、現代の複製技術を最大限に生かして、原図に忠実に再現されており、19世紀初期のイングランドの交通・運輸インフラの開発整備過程を認識するということだけにとどまらず、当時のイングランドの景観をイメージする点でも重要な手がかりを与えてくれる。

(伊藤喜栄記)

『台湾日々新報』マイクロフィルム版

『台湾日々新報』は1898(明治31)年5月1日、同年3月に後藤新平民政局長を引き連れて、第四代の台湾総督になったばかりの児玉源太郎の肝煎りで創刊されたものである。当時、台湾には

有力紙として『台湾新報』(1896年創刊)と『台湾日報』(1897年創刊)があったが、前者は薩摩系、後者は長州系という立場ではげしくいがみあっていた。

児玉は、植民地統治の実をあげるためには、何よりも世論の誘導が不可欠と考えて、両紙の合併に乗り出し、新たに『台湾日々新報』を創刊せしめたのである。以後、同紙は、総督府の手厚い庇護をうけた日刊の「御用紙」として、1944(昭和19)年3月31日に廃刊するまで、約半世紀の間刊行せられ、日本による台湾の植民地統治に大きな役割を果たした。

「内地」(日本)より多くの著名な学者を招致して編集に当たらせ、法令規則、時事、社会問題、さらには風俗・生活形態、台湾の歴史・文化などを克明に記したその紙面は、日本による台湾の植民地支配の実態をつぶさに物語る貴重な基本資料であり、第一級の歴史史料である。

これまで、この『台湾日々新報』は極めて限られた所にしか所蔵されていなかったが、この度、ゆまに書房により、マイクロフィルム版として、四期にわけて世に出されることになった。第一期明治編には『台湾日々新報』の創刊号から1912(大正元)年12月31日までが収められているが、併せて、『台湾日々新報』の前身ともいえるべき『台湾新報』も創刊号から廃刊にいたる号まで収められている。この明治編・全70リールは図書館に納められている。人文学研究所に納められているのは、続刊の第二期大正編(1913年1月から1926年12月)、第三期昭和編(上)(1927年1月から1935年12月)、第四期昭和編(下)(1936年1月から1944年3月)の全271リールである。

(中島三千男記)